REPORT6

ミュージカル
『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』

〈東京公演・東京建物Brillia HALL〉2024年3月9日(土)～30日(土)
〈宮城公演・東京エレクトロンホール宮城〉2024年4月12日(金)～14日(日)
〈埼玉公演・ウェスタ川越 大ホール〉2024年4月19日(金)～21日(日)
〈大阪公演・梅田芸術劇場メインホール〉2024年4月27日(土)～29日(月)

市村正親さん×大竹しのぶさんのゴールデンコンビで繰り返し上演されてきた『スウィーニー・トッド』にRioさんが初参加。宮本亜門さん演出の元、悪魔判事ターピンに扮して最恐の作品をさらに盛り上げました。

"スウィート・ポティートッド"にかぶりつくターピン判事。

長年お世話になっている市村正親さんと大竹しのぶさんに囲まれ嬉しそうなRioさん。後ろにはひょっこり部下のビードルこがけんさん!

『レ・ミゼラブル』で共演していた唯月ふうかさんと。こうして一緒にお芝居をするのは実は初めて。

初共演のこがけんさんとは、何度も一緒に食事へ行きすっかり仲良しに。

地方公演のオフタイム。「仙台、伊達政宗公の像。城下の街並みは絶景であった」by Rioさん

稽古場スタッフさんからの温かいメッセージに励まされました。ターピン判事のイラストも発見!

NOTE

ミュージカル『スウィーニー・トッド フリート街の悪魔の理髪師』ビジュアル撮影

前作『イザボー』に引き続き、ロン毛×実年齢よりかなり上の役への挑戦となりました。

いつものRioさんとはまるで別人。メイクの力ってすごい……!

REPORT7

望海風斗ドラマティックコンサート『Hello,』ゲスト出演

〈日本青年館ホール〉
2024年3月24日(日)

『イザボー』で夫婦役で共演した望海風斗さんのコンサートにゲスト出演。Rioさんは狂気王を演じていたため、今回のコンサートでようやく目を合わせながら歌うことができたと嬉しそうな二人でした。

本番直前!掛け声は「わっしょ〜い!」

『イザボー』では叶わなかったとびきり甘いラブソングをチョイス。『ルドルフ・ザ・ラストキス』より「Something more」を王妃(望海さん)とデュエットしました。

登場時のたっぷりのスモークは桜木涼介さん(演出・振付)のアイディア。

Rioさんのソロ曲は、望海さんも大好きだという映画『ゴッドファーザー』から「愛のテーマ」をお届け。

Rioさん歌唱後、望海さんがシルクハットに葉巻をくわえてダンディに登場!

望海さんからジャックダニエル風の容器に入ったお水をいただきゴクリ。Rioさんが持つとお酒にしか見えません(笑)。

楽屋オフショット集

TOPICS

『はやウタ』出演

〈NHK総合〉3月11日(月) 04:15

井上芳雄さんが司会を務める歌番組『はやウタ』に初出演。
Rioさんは「This Is The Moment」を早朝のお茶の間に響かせました。

番組内では
藝大時代の井上さんとの
秘蔵写真を初公開！

井上さんとは
『シャボン玉とんだ宇宙まで
とんだ』(2020年) ぶりの
共演となりました。

REPORT8

ラジオ公開収録『E-LOUNGE MUSIC PLACE』

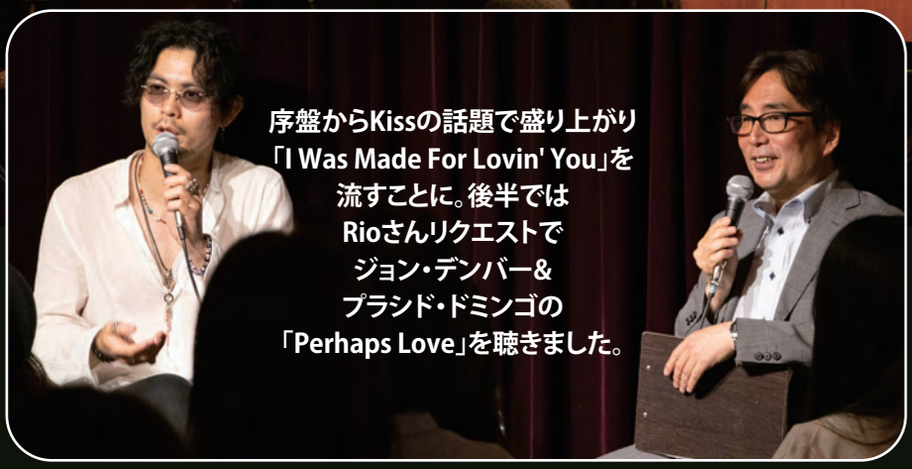
〈E-LOUNGE〉公開収録：2024年5月21日(火) 放送：2024年6月2日(日)19:00

パーソナリティ：立花裕人

東京・大井町にあるE-LOUNGEでラジオの公開収録に出演。
様々なジャンルの音楽を聴きながら、立花さんと共にRioさんの
これまでの歩みを振り返りました。

オープニングトークを聴きながら
出番を待つRioさん。

トークの合間にはタロットコーナーも。
占い師の白山真湖さんがRioさんの今後を
占ってくださったのですが、まさかの内容に
大喜びするRioさんなのでした。



序盤からKissの話題で盛り上がり
「I Was Made For Lovin' You」を
流すことに。後半では
Rioさんリクエストで
ジョン・デンバー&
プラシド・ドミンゴの
「Perhaps Love」を聴きました。

レコードラックのコーナー
では、E-LOUNGEのオーナー
坂元寿朗さんが様々な
レコードを解説付きで紹介。
この日はノラ・ジョーンズの
「Don't Know Why」を
チョイスして流してくれました。

壁一面にズラッと並ぶレコードの多くは、
なんと石井一孝さんから譲り受けたものなのだそう。

MEINUNG マイノング

2024年前半は2本の舞台の合間を縫って様々なコンサートに出演したRioさん。舞台を通して見つけた新しい発見や、歌い手として今感じていることを伺いました。公園での撮影時には、桜や緑に囲まれてリラックスした表情を見せてくれました。

『イザボー』から『スウィーニー・トッド』まで駆け抜けられたRioさんですが、体感としてはいかがでしたか？

忙しなかったですねえ（笑）。でも決して苦ではなく、楽しんでやれていたかな。『イザボー』の公演中に『スウィーニー・トッド』の稽古があったんですが、作品の世界観が全然違ったのでいい気分転換になっていたんです。ただ、いつも以上に体調を気にかけるようにはしていました。

身体のケアはどのように？

普段あまり白米とか食べないんですけど、公演中はスタミナをつけるためにとにかくお米とお肉をよく食べました。それでもどんどん痩せていきましたが（笑）。コンサートも控えていたので喉のケアもしっかりと。『イザボー』の現場にはトレーナーさんが入っていて、よく身体をほぐしてもらっていました。長期間の公演では身体のケアは絶対に必要なので、トレーナーさんがいるのはすごく助かりましたね。それにしてもみんなよくやったなあ～。

『イザボー』の狂気王シャルルは新しいRioさんを見ることができる役でしたが、演じていて新しい発見はありましたか？

そうですね。シャルルは“狂気王”と呼ばれているけれど、あくまで本人は正気なんですよ。彼は現代の医学でいう統合失調症だったそうなんです。その中の見当識障害という症状が、周りの人の顔や名前がわからなくなるというもの。実際にその状況に置かれたら誰だって怖いと思うんですよね。なぜ彼がああなってしまったのかを自分の中に落とし込んで演じないとできない役だろうなと感じましたし、実際に同じ病気で苦しんでいる人に対して失礼になってしまってもいけないなと。シャルルは周りからは「狂ってしまった」と思われていたかもしれないけれど、“狂気王”という名に囚われずに彼自身がどう感じたのかを考えるようにしたんです。この視点は新しい発見でした。

神奈川フィルハーモニー管弦楽団と共演したコンサートはいかがでしたか？

楽しかったですねえ。やっぱりオケで歌うのは気持ちいい！ 加耒（徹）さんと久しぶりに声を合わせることができたのも嬉しかったです。ナレーションの吉田（孝）さんも低くていい声なんですよ。あの声でナレーションしたあとにセリフを言わなきゃいけなかったので、つい引っ張られそうになりました（笑）。カーテンコールの「民衆の歌」はアンジョルラス時代を思い出しながら歌いました。ちょっと泣きそうになっちゃった（笑）。久しぶりの「民衆の歌」は胸熱でしたね。

その2日後の“かくりお”コンサートも大盛況でした。

改めて加耒さんと肩を並べて歌って、真面目に歌をやってきてよかったなと思いました。もし完全にミュージカルに染まっていたらきっとできなかったことだから。例えばこうもりの二重唱「夜会へ行こう」は芝居の側面もあったけれど、芝居についての打ち合わせはほとんどしていなかったんです。それでも間の取り方や強弱のフィーリングがピタッと合っちゃう。全然違うフィールドでやってきたのにいざ一緒にやると合う人って、なかなかいないんですよ。“かくりお”は定番化してやっていきたいですね。

3月～4月は『スウィーニー・トッド』にご出演されましたが、世界中で長年上演されてきた本作の魅力はどんなところに感じましたか？

まずスティーブン・ソンドハイムの音楽ですよね。聞く度にロンドンの情景やキャラクターの心理描写が巧みに描かれているのを感じます。ソンドハイムと友人だった宮本亜門さんが教えてくれたのですが、彼は「僕は歌い手のために音楽を書いているんじゃない。役者のために書いているんだ」と話していたそうです。だからお芝居と音楽がものすごく密接に書かれていて、音楽がドラマを紡いでいるんですね。長く上演されている作品は脚本もよくできていて。ちょっとしたすれ違いで起きてしまう悲劇にゾッとする場面がいくつもありました。

再び市村正親さんとの共演となりましたが、本番中の印象的なエピソードはありますか？

ターピン判事のメイクは1時間くらいかかるんですが、あるとき市村さんが舞台袖でメイクのアドバイスをしてくれたことがあったんです。そのとき「メイクしていく時間の中で段々と役に入っていくんだ。だからメイクってすごく大事なんだよ」と。確かにシワの一本でもどこに線が入るかで、その人がどういう人生を送ってきたのか、物事をどう捉えているのかということが滲み出てくるんです。メイクは役の人生を自分の中に構築していく作業のひとつなんですね。

最後に、2024年後半に向けての意気込みをお願いします！

前半は舞台を頑張ったので、後半は歌い手モードに専念したいなと考えています。もちろん演じることは楽しいので、これからも舞台は続けていきたいです。ただ純粋に歌い手としてもっと固めたいところもあって、挑戦したいこともいっぱいあるんですよ。DerMondistのみんなにはまだ言えないものも控えています。どうか楽しみに待っていてください。

Written/Photo by Ran Matsumura